

真実のいのち

一。大地は苦悩に充ちた難度海ではありますが、しかし真実のいのちが流れていて下さることによって、この苦悩は、苦悩のままに転ぜられて、真実のいのちの内容とにかして下さることを、真実の救いというのであります。

「海と言うは、久遠より己来、凡聖所修の雑修雑善の川水を転じ、逆謗闡提・恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水と成す。之を海の如しと喩ふるなり。良に知んぬ。経に説きて、煩惱の水解けて功德の水と成ると言うが如し。」

頂戴すべきであります。信楽の世界は、いのちの枯れた人間の自力の世界ではない。雑修雑善とか、逆謗闡提・恒沙無明の海水とか言われる世界は、全一なるいのちの流れていない世界の諸相であります。自力の世界には、いのちはない、それは、真実のいのちから隔離した人間の無明の諸相にすぎないのであります。我の相であります。

しかるに、本願の大海は、この雑修雑善の一切と、逆謗闡提恒沙無明の海水とを転じて、大悲真実恒沙万徳の大宝海水と成して下さるのであります。全一なる如来の功德は衆生の大信の境においてかくの如き救いを成就して下さるのであります。注意すべきは、衆生現前の大信の境に於てかくの如き救いは具性的事実となつて下さることです。

1

一。苦難に当面すること、それは万人が万人、好くところではありません。しかし、自分にふりかかつて来る逆縁を通して、はじめていかに我らのものに対する執着の根強いかを知らせて頂くことであります。そしてその時、我執が根強くものを言っている時、如来の教命も何も見失ってしまいます。けれどもそれは、根強い我が、我を通さんがために、真実の御いのちから隔離しているのであります。もしそのままで終るものなれば、無明の大海に流転してしまふであります。

如来の名号は、それ自体、絶対の大行であり、真実功德であります。それを受取つた大信は、そのままが満されきつた世界であります。満されきつた世界であります。故に、報謝の生活がはじまつて来るのであります。

報謝の生活は、全一なる真実のいのちの流れて下さる世界であります。この真実のいのちのみが一切の業苦、善悪等を転じて、いわゆる「至徳の風静かにして衆祀の波転ず」と静かに一切を融かして至徳の内容として下さるのであります。

一。いのちとは、何でありましょう。仏教ではこれを「慧命」といいます。智慧の命であります。くわしくは、「法身の慧命」であります。法身、生死を超えて滅ばぬ法身の御いのち即ち慧命であります。

凡夫は既に無明煩惱のために、慧命すでに滅しつくされてしまったものと言われます。しかるに、この衆生本願の名号に救われる時、如来の無量寿の御いのちは、大信

心の世界において行者のいのちとなり、衆生は無量のいのちに帰命して、如来のいのちをいのちとして生かされるのであります。これ即ち信心の智慧であります。「智慧の念仏うることは法蔵願力のなせるなり、信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし。」如来本願力は、行者の上に大信を成じ、大信はやがて、願となつて無限に生きぬくのであります。衆生の願作仏心の上には、如来のいのちが生きたもうてあるのであります。

一。いのちの流れているものは、苦難に出会えば、苦難故に、いよいよ輝き、ますます信力を増長しますし、いのちの流れていないものは、苦難に出会えば、滅んでしまひます。一切の現象はみな、諸行無常の相、即ち因縁生の相をしています。この如来の御いのちは、この因縁生をそのままの中に不滅の光輪と顕現して下さるのであります。滅ぶものをそのままに無量のいのちに生かして下さるのであります。私どもはこの如来のいのちに生かされて、一切を超えさせて頂くことであります。

一。水は低きに流れるが如く、如来のいのちもまた、低きに流れて下さるのであります。邪見憍慢の頂には、煩惱の雑草しか生えません。帰依合掌の低きところに、いのちの水は流れ、念仏の白蓮華は咲いて下さるのであります。この低きに合掌せずば、聞えないのが如来の御声であります。

一。本願の名号に生かされることは、いわゆる、涅槃の大樂に通うことであり、寂滅の境にあらしめんとしたもう大悲を領解することではあるが、しかし、大法に生かされるものは、樂を求めてはなりません。世尊成道の時、悪魔たちは、「汝が正しい智慧、真実の道に生きようとすれば、多くの苦悩が来り、もしそれを息めるならば、無上の享樂が待つであろう」とその成道を障げんとした。世尊はその悪魔の誘惑にも胴喝にも動きたまはず、悪魔たちは、その禪定を如何ともすることは出来なかつたのであります。しかしそれは決して対立による我的固定でも、無智による大胆でもなかつたのであります。智慧によつて真実を見、慈悲によつて一切衆生を抱きたもうが故であります。世尊をして成道せしめたものは、世尊の上流るる大慈悲でありました。一切衆生の上に己を捧げて永劫の苦情をも忍受しようとしたもう大慈悲こそ、世尊をして成道せしめたのであります。そしてその大慈悲こそ、無量寿仏の大慈悲そのものなのであります。

親鸞聖人またこの大慈悲に生かされたもうたのであります。九十年の御生涯は、苦難に満ちたものでありつつ、その中に一貫するものは、如来大悲の御いのちであつたのであります。

如何なる苦難に遇いましょうとも、一念この大聖の信境に思い至り、大慈悲を憶念する時、念仏の中に一切の問題は自然に融けてゆくことであります。「仮令身止諸苦毒中、我行精進忍終不悔。」念仏生活の途中、有縁の道俗の上に、尊い念仏の生活を拝み、闇に泣いた家庭が光に蘇り、父母を泣かした子が孝道に立ち、邪見の老婆が柔

軟な妙好人に変わる等々の尊い相を拝ませて頂く時、苦毒の中にも安らかに立たせて頂けるようであります。

一。「仏法の味を愛樂し、禪三昧を食となす。」とは、浄土の菩薩の受用功德、即ちその食物を示されたものであります。生きているものはみな食物を頂くように、菩薩もまた、仏法を以て、禪三昧を以て食とするのであります。『論註』には、仏法食と、禪定食と、三昧食の三食とし、『法華經授記品』には、法喜食、禪悦食の二食とし、『法華文句』には、法と喜と禪の三食とする等、多少の異同はありますが、要するに、法喜食とて仏法を愛樂することと、禪三昧を食物として、法身無漏の慧命を任持するのが浄土の菩薩であります。信心の智慧に住する者も正法の食を摂り、法喜食に養われるのであります。不断に聞法精進することは唯一の法味樂であります。真実のいのちは、この正法の食物によつて養われるのであります。

一。菩薩功德成就を観察するにあたつて、菩薩の功德を愛樂することを示して、「無願不滿然菩薩愛樂功德 如海吞流無止足情」といい、その例として、阿那律尊者は盲目で針の糸を継ぐことが出来ないの、「誰か功德を愛する人は、我がために、糸を継ぎたまえ」と言えば、これを聞かれた世尊が、「我愛福德」とて阿那律の為に糸をつないでやりになりました。驚き喜んだ尊者は「世尊よ、世年の功德は猶いまだ満たないでありますか」とお問いすると、

「我功德円満 無所復須 但我此身從功德生 知功德恩分故 是故言愛」

とお答えになりました。智度論十には「我雖功德已満 我深知 功德恩 功德果報 功德力」

とあります。ああ、功德の力、正法の力、やがて大信心の力、この力は真実のいのちの中に満ちています。三毒の煩惱のみの凡夫は哀れであります。

我らは、皇国の国土の中に現行したもう不滅の御いのちに帰依して、愛憎を超え、順逆を超えて真実中の真実に生かされてゆきましよう。